

2021 年度 支部活動報告・発表要旨

東北支部 活動報告・発表要旨

2021 年 8 月 21 日	佐々木 和貴	図像から見た 18 世紀の『テンペスト』受容
2021 年 8 月 21 日	福士 航	『から騒ぎ』を読む
2022 年 3 月 28 日	川崎 和基	ミルトンと霊魂死滅論

「図像から見た『テンペスト』受容」

佐々木 和貴

18 世紀に入ってから刊行されたシェイクスピア全集には、収録作品のすべてに口絵を添えたものがあつた。本発表では、その草分けとなつたニコラス・ロウ版全集の初版（1709）と二版（1714）、そしてトマス・ハンマー版全集（1743-44）、さらにベル版全集（1773-4, 75-78）を取り上げた。そして、当時シェイクスピア喜劇で最も人気があつた『テンペスト』の口絵を例にとって、この時期のシェイクスピア受容の変化と多様性を考えてみた。

まずロウ版初版の『テンペスト』口絵については、ダヴェナント&ドライデンによる改作版『テンペスト』のトマス・シャドウエルによるオペラ版（1674）の冒頭場面に対応していること、つまり原作ではなく、改作にあわせてカスタマイズされていることを示した。またロウ版の第二版では、原作の 5 幕 1 場の和解の場面が採用されており、絵柄も初版のバロック調から、ロココ調の繊細で柔らかいフェミニンなものに変更されていることを示した。そしてこの口絵の差し替えから、出版業者ジェイコブ・トンソンの販売戦略の変更が読み取れる可能性を指摘した。

次にハンマー版については、その最大の特徴が（キャリバンとエアリアルも含めて）主要人物をすべて一枚の図版に登場させていること、つまりこの劇のいわば「目で見えるあらすじ」になっている点にあることを示した。またベル版については、編者フランシス・ジェントルマンのシェイクスピアを理想化・衛生化しようとする意図とは関わりなく、その口絵は、シェイクスピアを純粋に娯楽として消費しようとする観客の好みを反映していることを指摘した。その結果、ハンマー版については、テキストと口絵の間に相互補完関係が生じていることが、またベル版については、編者の意図と口絵がねじれた関係にあることが、指摘できたと思われる。

またこうした通時的な分析を介して、「長い18世紀」におけるシェイクスピア受容の変化と多様性を考える上で、口絵という切り口の有効性も示唆できたのではないだろうか。

主要参考文献

- Davenant, Sir William, and John Dryden. *The Tempest, or The Enchanted Island*. Eds. Maximillian E. Novak and George Guffey in Vol.10 of *The Works of John Dryden*. 20 vols. University of California Press, 1965-2000.
- Shadwell, Thomas. *The Tempest, or The Enchanted Island*. Ed. Montague Summers in Vol.2 of *The Complete Works of Thomas Shadwell*. 5 vols. Benjamin Blom, 1927, reissued 1968.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. Nicholas Rowe in Vol.1 of *The Works of Mr. William Shakespear*. 6vols. London,1709.
- *The Tempest*. Ed. Nicholas Rowe in Vol.1 of *The Works of Mr. William Shakespear*. 9vols. London,1714.
- *The Tempest*. Ed. Sir Thomas Hanmer in Vol.1 of *The Works of Shakespear*. 6vols. Oxford, 1743-4.
- *The Tempest*. Ed. Francis Gentleman in Vol.3 of *Bell's Edition of Shakespear's Plays*, 5vols. London, 1774.

『から騒ぎ』を読む

福士 航

本発表では、*Much Ado About Nothing* におけるメタ的な言語使用を考察した。『から騒ぎ』において、もっとも容易に見て取れるメタレベルでの言語使用は、2幕3場50–55行にあらわれる‘note’, ‘noting’, ‘nothing’の自意識的な繰り返しである。‘nothing’と‘noting’の発音が、当時の英語では同じだったことに起因する音の戯れではあるが、劇タイトルへの言及とも理解でき、そうすると劇世界を構成している論理そのものへの言及とも読むことができる。‘nothing/noting’の矛盾をはらんだ二重性について、本発表では、テキストによる言語の特質そのものへの言及であると主張した。『から騒ぎ』という劇テキストは、劇タイトルを常に反射するメタレベルでの言語使用という観点から眺めてみると、実に多くの言語使用諸側面のカテゴリーを列挙していることに気づかされ、この劇の中心的主題は言語的特質のカタログ化にあるように見えてくる。テキスト中に使用されている詩的技法（oxymoron, paradox）、言葉の戯れ（malapropism）、韻文と散文、言語理論（orthography、「名前の正しさ論争」）などを検討した。口から出る息に過ぎないnothingに等しい言語が、極大のnotingと表裏一体であるというパラドキシカルな象徴体系が、言語なのだと言えるのかもしれない。そしてそのような洞察が、ほかでもない演劇のテキストにおいて表出していることにも意味があるように思われる。ほぼなにも一つ舞台装置のないまっさらな板の上に、世界を全て載せてやろうと意気込む、逆説に満ちた英国ルネサンス演劇の劇場において、言語が本質的に抱えるパラドキシカルな志向性をつまびらかにするテキストが生み出されたのは、決して偶然ではないだろう。

ミルトンと靈魂死滅論

川崎 和基

Paradise Lost 第10巻783行で「私は完全に死ぬことができるのか」とアダムは死について問いかけている。キリスト教では、罪を犯した人間の魂と肉体は死を迎えた後、最後の審判を受け、天国あるいは地獄に至るまで、どこにあり、どのような状態であるか関心を集め議論がなされてきた。プロテスタント達は、煉獄を否定しながら、死後の魂の状態や行き場所について議論を行ってきた。死後の魂について、初期のルターは、カトリックの煉獄の考えを否定するうえで、魂は眠るのだと主張した。一方、カルヴァンは *Psychopannychia*（1534）で

Psychopannychia を主張し、靈魂睡眠を聖書に基づかない逸脱した想像であると否定した。ウィリアム・パーキンスもカルヴァンの主張を受け継ぐものの、*A Golden Chain* (1591) でむしろ聖書解釈から靈魂睡眠を否定した。内乱期に入ると、長老派のトマス・エドワーズは *Gangraena* (1646) で、またエフィライム・パジェットは、*Heresiography* (1645) で、靈魂睡眠を主張する再洗礼派やレベラーズのリチャード・オーバートンらを非難した。この靈魂睡眠に対する異端視は「冒瀆と異端の処罰法」(1648) でも見られた。一方、ジョン・ミルトンはこのような異端への非難を認識してもなお、靈魂睡眠説からさらに靈魂死滅論を主張した。

Christian Doctrine 第1巻13章で、原罪を負った人間の肉体だけが罪の咎を受けて、魂がその咎を逃れることはありえないため肉体と魂は死滅するが、その状態は魂が寝ている状態で、また肉体は命がない状態で完全には死んでおらず、キリストの再臨のあと天へ登っていくとミルトンは主張する。本発表では、聖書解釈に基づき、また、さらに一原論的天地創造観とアルミニウス主義的救済論に基づくミルトンの靈魂死滅論を論じた。

主要参考文献

- Burns, Norman T. *Christian Mortalism from Tyndale to Milton*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1972.
- Campbell, Gordon and Thomas N. Corns, et al., *Milton and the Manuscript of De Doctrina Christiana*, Oxford: Oxford UP, 2007.
- . "De Doctrina Christiana: An England that Might Have Been." *The Oxford Handbook of Milton*. Eds. N. McDowell and N. Smith. Oxford: Oxford UP, 2011. 424–35.
- Fallon, Stephen M. *Milton Among the Philosophers: Poetry and Materialism in Seventeenth-Century England*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1991.
- Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. London and New York: Faber and Viking, 1977.
- Hunter, W. B., C. A. Patrides and J. H. Adamson. *Bright Essence: Studies in Milton's Theology*. Salt Lake City: University of UP, 1971.
- Rogers, John. *The Matter of Revolution: Science, Poetry and Politics in the Age of Milton*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1996.
- Rumrich, John. *Matter of Glory: A New Preface to Paradise Lost*. Pittsburgh, PA: U of Pittsburgh P, 1987.
- . "Paradise Lost and Heresy." *The Oxford Handbook of Milton*. Eds. N. McDowell and N. Smith. Oxford: Oxford UP, 2011. 510–24.

2022年2月26日	松村 祐香里	ミルトンの初期の詩について オルフェウスの視点から
2022年2月26日	高根 広大	『ヴェニス商人』における女性教育
2022年3月26日	岩永 弘人	初期近代のソネットを読む：私の好きなシェイクスピアのソネット、トップ3

ミルトンの初期の詩について オルフェウスの視点から

松村 祐香里

ミルトンが詩人として歩み始めたころに書いた詩には、オルフェウスが何度か登場する。本発表では、特に「リシダス」のパストラル・エレジーというジャンルに着目し、詩の中でオルフェウスのモチーフがどのような意味を持つのか考察した。

「リシダス」はその詩の舞台、登場人物の設定、その名前などからパストラル・エレジーに分類されている。これは、ごく簡単に言えば、詩人が羊飼いや牧人として、牧歌的風景の中で友人の死を悼むというものである。また、この詩はミルトンの学友であったエドワード・キングに捧げられた。キングはアイルランドの名家の子息で、将来を嘱望されていたものの、帰省する途中に乗っていた船が沈没したため、1637年の夏に水死した。その死を悼んでケンブリッジ大学の学友たちが追悼詩集を編み、ミルトンも一篇の詩を捧げた。

キングが若くして水死したことと、オルフェウスが理不尽な理由で殺され海を揺蕩たったことを思えば、両者を重ね合わせることは容易だろう。また、詩人と共に草木が友人の死を嘆くという描写は、自然に語り掛ける詩人とそれに答える自然という関係がなければ成立しない。ここで神々や人間だけでなく、万物に愛されたオルフェウスのイメージが非常に有効になってくる。さらに、清水によれば、オルフェウスがもとは森の住人であったことはパストラル・エレジーにおいて無視できない要素であるという。清水は、ウェルギリウスの『牧歌』を参照しながら、詩に優れたある牧人を「森のオルフェウスと呼ぼう」と言わせていることから、オルフェウスが牧歌詩人の祖とみなされていた証左であると指摘する。以上のことから「リシダス」におけるオルフェウスは、亡くなった牧人でもあり、その死を自然と一

体になって悼む牧人でもありうるのだ。最後に、牧歌詩人のラテン語 *vatem pastres* がもつ預言者としての側面に触れた。*vatem* は、靈感を受けた詩人も意味するので、この語には宗教詩人の意味も付与されている。「リシダス」にある墮落した教会に対する警鐘は、おだやかな風景の間でやや異質な印象を与える。この一節をパストラル・エレジーの中にうまく統合するのもまた、牧歌詩人の原型であるオルフェウスであった。

「リシダス」には、優れた詩人でありながら海で夭折した牧人、友の死を嘆く牧人、教会の腐敗を糾弾する詩人が混在する。これらの矛盾する立場を、オルフェウスのイメージが緩やかにまとめ上げていた。ミルトンは、『牧歌』のなかで牧歌詩人と呼ばれたリシダスの名をキングに与え、自分をその仲間の牧人として描いた。こうすることで、羊飼いでありながら宗教詩人であることを自然に両立したのである。

主要参考文献

Milton, John, *The Complete Shorter Poems*, ed. by John Carey, 2nd edition (London: Longman, 2007)

「リシダス」『ミルトン英詩全訳集 上』宮西光雄訳（金星堂、1983年）

Mayerson, Caroline W, "The Orpheus Image in Lycidas," *PMLA*, 64 (1949), 189-207

Tuve, Rosemond, "Theme, Pattern and Imagery in Lycidas," *Themes in Five Poems by Milton*

(Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1957)

Orpheus: The Metamorphoses of a Myth, ed. by John Warden (Toronto: University of Toronto Press, 1985)

稲用茂夫「ミルトン作「リシダス」を再考する」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』35(2) (2013), 95-108

清水宏「オルフェウスと『リシダス』：ルネサンス・パストラル・エレジー論のひとつの展開」『主流』55 (1994), 1-20

武村早苗「ミルトンにおける死（4）Lycidasを中心に」『川崎医療福祉学会誌』8 (2)

(1998), 249-255

『ヴェニス商人』における女性教育

高根 広大

『ヴェニス商人』において、男装したポーシャは裁判を執り行い、夫バサーニオの友人アントーニオを救う。本発表では、このような活躍を可能にしたポーシャの教養について考察し、初期近代イングランドの教育論と比較しながら、劇中で女性教育がどのように表象されているかを論じた。

ファン・ルイス・ヴィヴェスは『キリスト教女性の教育』(1523)において、道徳教育を通して女性を抑制すべきであると説いた。また、『提言』(1581)において、女性教育を積極的に論じたリチャード・マルカスターでさえ、女性が公的な場で活躍することを想定していなかった。ポーシャの教養はこうした女性教育への制限をある程度反映している。実際、ポーシャは裁判を計画する際、ベラーリオ博士に手紙を書き、助けを求めている。材源の一つ、ジョヴァンニ・フィオレンティーノの『イル・ペコロネ』(1558)には、法学博士の服を着る描写はあっても、誰かに助けを求める描写はない。

少年俳優が演じたポーシャとネリッサの会話には、女性が排除されていたグラマー・スクールの教育が表象されている。たとえば、ポーシャがネリッサの言葉に対し、「いい格言ね、言い方も良かった」(1.2.10)と返すのは、格言を習い暗唱する生徒を教師が評価するようである。彼女たちの男装は、ただちに公的な場での活躍を約束するものではない。たとえ男装したとしても、一通り教育を終えた一人前の男性として見られるためには、喧嘩や恋愛の話などを吹聴することで、「学校を出てから一年以上になる」(3.4.75-76)と思わせなければならぬからである。

バサーニオは箱選びの際、雄弁術に女性性を見出し、金の箱の装飾と重ね、非難する。これは初期近代イングランドの教育論に見られる女性の雄弁術への危険視を反映している。裁判の後、ポーシャを待つジェシカとロレンゾーの会話には、オウィディウス作品の女性が登場する。オウィディウスの『恋の技法』では女性の歌が海の怪物シレンにたとえられているが、声で誘惑し船乗りの男たちを海に沈めるこの怪物は、女性の聴覚的な誘いに対して男性が抱く脅威を示している。ポーシャが裁判で発揮する雄弁術は、シャイロックを「証文通り」という響きで誘い出し、海に沈めるシレンのようである。興味深いことに、女性の雄弁術教育を軽視したヴィヴェスは、オウィディウスの作品を女性に読ませるべきでない代表例として挙げている。

シャイロックが追い詰められる最後の一打となったのは、証文に書いていないからとし

て、医者を呼ぶのを断ったことである (4.1.253-58)。ポーシャはシャイロックの明確な殺意を引き出すことで、殺人未遂の外国人が財産を没収されるという法律に言及する。ポーシャが女性的な雄弁術によって誘い出し、その罪を暴き出したのはバサーニオも同様である。ポーシャが裁判の場にいると気づかず、アントーニオを救うために妻を失ってもいいと言ってしまう場面は、観客の笑いを誘う (4.1.278-85)。指輪をポーシャから受け取り、バサーニオが最後によく気づいたかもしれないのは、たんに彼女が男装して男性たちを救ったということだけでなく、ポーシャが示す女性の教養は男性の教養に劣らないばかりか、男性に女性への理解を教えることができるということなのである。

主要参考文献

- James, Heather. "Shakespeare's learned heroines in Ovid's schoolroom." *Shakespeare and the Classics*, edited by Charles Martindale and A. B. Taylor, Cambridge UP, 2004, pp. 66-85.
- Moncrief, Kathryn M. and Kathryn R. McPherson. "Shall I teach you to know?": Intersections of Pedagogy, Performance, and Gender." *Performing Pedagogy in Early Modern England: Gender, Instruction, and Performance*, edited by Kathryn M. Moncrief and Kathryn R. McPherson, Routledge, 2016, pp. 1-17.
- Mulcaster, Richard. *Positions*. Edited by Robert Hebert Quick, Longmans, Green and Co., 1888.
- Ovid. *The Art of Love and Other Poems*. Translated by J. H. Mozley and revised by G. P. Goold, Harvard UP, 1979.
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Edited by John Drakakis, Bloomsbury Publishing, 2010.
- Vives. Juan Luis. *The Instruction of a Christen Woman*. Edited by Virginia Walcott Beauchamp et al., U of Illinois P, 2002.
- Waters, William, trans. *The Pecorone of Ser Giovanni*. Lawrence & Bullen, 1897.

初期近代のソネットを読む：私の好きなシェイクスピアのソネット、トップ3

岩永 弘人

大学院以来、様々なマイナーソネットターの連作ソネットを読み、研究してきたが、今回この研究プロジェクトの原点とも言えるシェイクスピアの『ソネット集』に立ち戻り、エリザベス朝のソネット流行の特質を踏まえた上で、もう一度読んでみようというのが発表の主旨であった。

大学院を修了して以来『ソネット集』を取り巻く環境も変わり、イングラム&レッドパスからスティーブン・ブース、ヘレン・ベンドラー、キャサリン・ダンカン＝ジョーンズ、ドン・パターソン、と様々な個性ある校訂と注釈を経て、今日に至る。一番新しいところでは、2018年版のラウトレッジ版のシェイクスピアの全詩集もある。（どちらかと言うと、教科書を意識したものだが。）本発表では、これらのテキスト（特に90年代以降のもの、そして、日本の翻訳や注釈）を参照しながら『ソネット集』全体を読み直し、自分の偏見に基づいて、改めてどのソネットが自分の耳に美しく響くかを考えてみた。（その際、18番や116番といった定番ソネットは「殿堂入り」として除外した。）そしてトップ3を選んだ。

まず扱ったのは29番で、サブタイトルは<いじけるという事>。「この男の学識を羨み、あの男の見識を羨む」と、他人の才能を羨む詩人シェイクスピアの声は、私には真実のもののように思える。シェイクスピアは、「絶対値」的なもの、たとえば「悲しみが100であれば、それを乗り越えた時は喜びも100」のような、まったく逆の極にある感情や概念を、絶対値で比喻するのが得意であると思う。つまり、感情のレベルでも、劣等感が100な時もある一方で、時として誇りや自負心も100になる時がある事を指摘しておきたい。次に、第2位は147番。このソネットでは、病いをテーマにしている、毒となるものを自ら求めてしまう人間の性のようなものを実にうまく歌っている。その病いとはもちろん恋の病いである。清廉潔白な人間は必ずしもモテない、というのは今も昔も同じ。怖いもの見たさもある。最後に1位にあげたのは56番。こちらの年齢のせい、またルネサンスという言葉がすでにReであるせい、か‘renew thy force’とか‘return of love’とか、最近REにめっぽう弱い。正反合の弁証法が、ソネット（特にシェイクスピアのソネット）の常であるとするならば、このソネットのロジックはまさに教科書通りである。一旦転んだり、躓いたりした人間に、シェイクスピアは意外にやさしい。第3位にあげた「いじけた詩人」シェイクスピアであるから、このような結果となるのかと思われる。

今回の発表では、ソネットの説明をしながら、これまで十七世紀英文学会やその他の学会でお世話になった先生方への謝辞を述べていく機会にもさせていただいた。かなり個人的内容になってしまった事をお詫びしつつ、この場を借りて東京支部の皆様の寛容さに、謝意を述べさせていただきたい。

主要参考文献

- Booth, Stephen (ed.) *Shakespeare's Sonnets*. New Haven : Yale University Press, 1996.
- Duncan-Jones, Katherine. *Shakespeare's Sonnets*. London : Nelson, 1997.
- Evans, Blakemore. *The Sonnets*. Cambridge : Cambridge University Press, 2006.
- Ingram, W. G. and Theodore Redpath (ed.) *Shakespeare's Sonnets*. London : University of London P, 1964.
- Paterson, Don. *Reading Shakespeare's Sonnets : a New Commentary*. London : Faber, 2010.
- Seymour-Smith, Martin (ed.) *Shakespeare's Sonnets*. London : Heinemann, 1963.
- Shrank, Cathy and Raphael Lyne (ed.) *The Complete Poems of Shakespeare*. London : Routledge, 2018.
- Vendler, Helen (ed.) *The Art of Shakespeare's Sonnets*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1997.
- 大場健治訳註 『ソネット詩集』 東京：研究社、2018。
- 小田島雄志訳 『シェイクスピアのソネット』 東京：文藝春秋社、2007。
- 川西進 編注 『ソネット集』 東京：音羽書房鶴見書店、1971。
- 嶺卓二 編注 『ソネット集』 東京：研究社、1974。

2021年6月26日	江藤 あさじ	<i>Paradise Lost</i> における Sin の罪
2021年12月26日	山本 真司	シェイクスピア劇における預言者表象：シビュラを中心に
2022年3月26日	塚田 雄一	Nathaniel Butter と劇作家たち — 17世紀初期ロンドンの演劇出版文化 —

Paradise Lost における Sin の罪

江藤 あさじ

John Milton の *Paradise Lost* において Satan の娘 Sin は、Satan が天上にて謀反を企んでいる最中に誕生する。Satan の頭から飛び出した Sin は、最初は不吉なもの前兆として恐れられるも、次第に Satan の謀反に加担するものたちを魅了していく。中でも Satan が最も彼女に惹かれ、秘密裏な関係を持ち、息子 Death を身籠らせる。今回注目したのは、Sin は誕生の瞬間から「罪」という意味の名をあたえられていたことである。一体 Sin の罪とは何なのか。Satan から誕生したとはいえ天上に存在し、そして神しか創造の業をもたない以上、罪を犯した状態で誕生したのだと Milton が描いたとは考え難い。もし Sin が徐々に現代的な「罪」という意味を体現していったのだとすれば、彼女の最後の「橋の建設」という行為は人間にとって非常に暗示的である。

まず Sin は、天上でただ一人「女性」と認識されてしまったが故に Satan と秘密裏に関係を持つこととなった。この「秘密裏」という言葉が、神に祝福されたアダムとイヴの夫婦関係とは異なり呪われるものであったことを暗示しており、これが Sin の犯した一つ目の罪である。それは非常に passive な罪であったかもしれないが、神の意に沿わない関係は罰を受けることとなる。その罰は Eve に与えられたものとは比べ物にならない終わりなき身悶えする苦しみであり、まさにこれが、神ではなく Satan に従うことを彼女に選択させてしまうのだ。直前まで守っていた神からの命である地獄の門番という役割を目前の苦痛から逃れるために放棄してしまい、悪を閉じ込めることから真逆の、地獄と新たな世界を結ぶ橋の建設に能動的に着

手する。この神から離反することを選択したことが、彼女の2番目の罪である。Sinが橋の建設に着手したのは、かつて地上に向かうSatanが翻弄された混沌の領域である。そこは神が万物を創造するにあたりその原材料とすべく、みずからの善意を退かせて生みだした場所である。そこで、神の創造と同じような行為をすること、これがSinの第3の罪ではなかっただろうか。神の意思がどう働いたのか、彼女はSatanとは違い、易々として橋をcreateする。しかし、creationと思っていたその行動は、実は結局自らをもuncreateすることへと導いてしまう始まりとなる。彼女の妊娠の様子が産んでいるのかいないのかが不明瞭な状態にあることをSinとDeathの子供たちの様子が物語っているように、彼女が勝利のモニュメントになると信じた地獄と地上を結ぶ橋は、最終的にmiscreatedといわれたDeathにより、神のrecreationの際に不要なものとして排除されるものを全てuncreateするという行為を実現するための橋となるのだ。このようにSinの罪を追っていくと、人間が自由意志により罪を犯すことを選択したことで自らを破滅させていくプロセスを、MiltonがSinを通して示しているように思われる。

主要参考文献

- Cummins, Juliet Lucy. ed. *Milton and the Ends of Time*. Cambridge, England and New York: Cambridge University Press, 2003.
- _____. "Milton's God and the Matter of Creation." *Milton Studies* 40 (2001): 81-105.
- Fallon, Stephen M. *Milton among the Philosophers: Poetry and Materialism in Seventeenth-Century England*. Ithaca, New York: Cornell UP, 1991.
- Fisher, S. "Circean Fatal Woman in Milton's Poetry: Milton's Concept of the Renaissance Woman." *University Microfilms International*, 1971.
- Lurker, Manfred; 林捷訳『鷲と蛇—シンボルとしての動物』東京：法政大学出版局, 1996. (叢書ユニベルシタス)
- Milton, John. *Milton: Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1990.
- _____. *Milton: Poetical Works*. Ed. Douglas Bush. Oxford: Oxford UP, 1988.
- _____. *Complete Prose Works of John Milton*. Vol.6. Trans. John Carey. Ed. Maurice Kelley. New Haven and London: Yale UP, 1973.
- Rumrich, John and Fallon Stephen M. ed. *Immortality and the Body in the Age of Milton*. : New York: Cambridge University Press, 2018.
- Pagels, Elaine; 絹川久子・出村みや子訳『アダムとエバと蛇』東京：ヨルダン社, 1993.

本発表では、10月10日に開催されたシェイクスピア学会における伊藤博明氏の特別講演「シェイクスピア時代のシビュラ図像集について」を受け、主にシェイクスピア作品のテキストとコンテキストについて預言者表象としてのシビュラ像の考察と分析を行った。クリスピン・デ・バセを経てマーティン・ドルーシャウトに至るルネサンスのシビュラ像の系譜については伊藤(2018, 2021)に詳しいが、本発表ではジェシカ・マレーのシビュラ論(2010)を援用し、ルネサンスにおける預言者としてのシビュラ像を、特にシェイクスピア作品と同時代の社会文化的文脈において考察した。そして、「預言」というものが混迷を深めた時代には極めて有効な政治的ツールとみなされ、多様な党派によって政治的プロパガンダの一種として用いられていたことを確認した。さらにシビュラ像についても、特徴ごとに表象を5項目(エリザベス女王、悪魔の侍女、処女・ミューズ、ヴィーナス、ダイアナ)に分類し、より視覚的理解を深めるために複層的にマッピングを行って説明した。さらに、シェイクスピア作品において、預言者の関連語(Sibyl/Prophecy/Oracle)がどのように使用されているかを詳細に分析し、どのような社会的文脈が考えられるかを考察し、エリザベス女王表象の関連でどのように魔女化・老女化・滑稽化の効果が活用され、社会秩序の不安定要因が劇的に回収され、また James 王表象の Magus としての男性魔術師像へと変化していくかを跡付けた。また後半では、マーティン・ドルーシャウトのテキストおよび、マティアス・クワッドによる「序文」に描かれたシビュラ表象について、当時制作されたトレンチャー図絵との比較から分析を進めると同時に、ジェイン・シーガーが1589年にエリザベス女王に献上した『10人のシビュラの神聖な預言』の翻訳書についても、宮廷ネットワーク形成のためのギフト交換の視点から綿密なテキスト分析を行った。そして最後に、シーガーの献上本の物質文化的な意味に関して社会文化的文脈から考察を行い、当時の宮廷人がシビュラ像を援用することによってどのように権力者(庇護者)と親密で有用な関係を構築しようとしたかについて明らかにした。

【参考文献】

- Droeshout, Martin. "XII Sibylla Icones. The prophecies of the twelve sybills" (1620-1630).
- Gazzard, Hugh, "AN ACT TO RESTRAIN ABUSES OF PLAYERS (1606)." *The Review of English Studies*, vol. 61, no. 251, Oxford University Press, 2010, pp. 495-528 (499).
- Gosson, Stephen, *Playes Confuted in Five Actions*, 1582, sig. C1r-C2v.

- Griffiths, Antony, “A PRELIMINARY LIST OF SETS OF PRINTS OF HUMAN FIGURES, MOSTLY OF ALLEGORICAL SUBJECTS Published in London, or abroad with English texts, during the seventeenth century,” *The Print in Stuart Britain, 1603-1689*, 1998, 307-13.
- Malay, Jessica L., *Prophecy and Sibylline Imagery in the Renaissance: Shakespeare’s Sibyls* (2010).
- Seager, Jane, “The divine Prophecies of the ten Sibills”, [presented to Queen Elizabeth: 1589].
- Sidney, Sir Philip, *Defence of Poesi* (1595) (フィリップ・シドニー, 富原芳彰訳注『詩の弁護』研究社, 1968)
- 伊藤博明「サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像について」『専修人文論集』第 102 号, 2018, 127-159.
- 伊藤博明「クリスピン・デ・パセのシビュラ図像集の英語版について」『専修人文論集』第 109 号, 2021, 79-133.

Nathaniel Butter と劇作家たち—17世紀初期ロンドンの演劇出版文化—

塚田 雄一

※ 発表者の都合により、要旨・参考文献は非公開。